慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小島昌太郎著 海運経済論第一巻
Sub Title	
Author	増井, 幸雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.1 (1921. 1) ,p.151- 153
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210101-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ける社會主義の復活の顚末を記し、更に集産主義と、之に反抗する諸主義を論じ、英國勞働黨の改造にその筆を揮いてゐる。

今、本書全體の價値について言へば、勿論英國社會主義の全體を記述したものとして貴重な文獻であると云ふより外はない。更にまた著者その人が、その書の序文に見えるやうに英國通であり、且つ獨逸文で既に先年英國社會主義史の著述のあることは、彼がこの書の著者として適任であることを物語るものである。然し第二卷全體の構成上その第三部たるチャーチズムの運動の餘りに詳細であつて、その第四部即ち千八百五十五年から千九百二十年に至るまでの社會主義學說並運動が、その第三部に比較して、餘りに簡略であることを遺憾とする。然し是は構成上の缺點であるが、更に私達の注意しなければならないことは、著者がマルクス主義者であることである。而して著者がマルクス主義者であることが著しくこの書に表はれてゐる點である。嘗て小泉敎授は英國社會運動史に關する諸文獻を紹介批判して、ベェアー氏が千九百十二年獨文にて出版した Geschichte des Sozialismus in England に及び、この書の著者がマルクス主義であることを念頭に置いて、讀者はこの書を讀むべきことを注意したことがある。（三田學會雜誌第十一卷第二號「英國社會運動史について」（上）參照）この批評はまた彼の英國社會主義史第二卷についても言ふことが出來やうと思ふ。社會主義史上においてカアル・マルクスの名の重要であることはこゝに贅言を要しない、またマルクスが千八百四十九年から千八百八十三年の死に至るまでロンドンに居住し、さうしてその社會主義運動に、社會主義學說に貢獻した事績を打ち消すことは出來ない。けれども英國における カアル・マルクスの影響は極めて少數なる外國亡命客と、ハインドマンを通じて少數な英國人に限られてゐたと云ふことは多數の社會主義運動史家の認める所である。然るにベェアー氏はマルクス並にその學徒たるハインドマン一派の社會民主々義同盟の學說並に運動に關して、英國特有の社會主義であるフェビヤン社會主義、ギルド社會主義に關してよりも、より多くの頁數を費してゐる。このことは著者がマルキストであつて、マルクス主義過重視の弊に陷つたものであらうと思はれる點である。

然し、一國における一運動の全般の歷史を書くことは極めて難事たるを失はない。かゝる難事業を遂行したと云ふ點のみでも、その見方の偏してゐる位のことは默過すべきことであらうと思はれる。ウェッブ氏の「英國における社會主義」その他二二の英國社會主義史を讀まれた人は更らにベェアー氏の著書を繙くことによつて、英國社會運動に關してより廣汎な知識を得ることが出來るであらう。（加田哲二）

小島昌太郎著「海運經濟論第一卷」

京都弘文堂發行　定價金五圓

本書は小島助敎授が京都帝國大學經濟學部に於ける講義を整理增訂して公にしたもので、今後幾年かの間に完成すべき海運經濟論の一部をなすものである。全卷三百八十餘頁を緒論と船舶論とに宛て、分つて緒論を三章、船舶論を五章とする。今その大要を紹介すると、緒論の第一章「國民經濟と海運」に於て先づ一般的說明として古代及び現代に於て海運の重要視せられし又はせらるゝ所以、國際貿易補助の機關として海運の重要なる所以、海運獨立の必要ある所

以、國民産業の一として海外屬領地との關係に於て、並に國防との關係に於ての海運の地位をば内外各國の例を以て説明して居る。次に第二章は「我國の經濟と海運」と題し人口問題を解決する爲には結局商工立國主義によらざるべからず、その爲めには又海運の發達は絶對的に必要なることを論じ、猶ほ本邦の海運は現時の發達程度を以て滿足すること能はざることを述べて居る。そして第三章に於ては海運經濟の内容と構成とを一言して緒論を終つて居る。次に船舶論は著者の見によれば海運經濟論の本論を構成すべき海運經濟の原理と政策との研究に對する豫備知識として必要なるものであつて、第一章に於て船舶の意義と船舶論の内容とを示し、第二章に於ては「船舶の構成部分」と題して船體及艤裝の各部分や船體の進水に至るまでの造船手續を説明し、第三章に於ては「船舶能力」の題下に總噸數、純噸數の如き容積上の能力と、排水噸數、重量噸數の如き重量上の能力と、速力との三者並に是等に關係せる事項を説明して居る。第四章は「商船の發達」の研究に宛てられ、丸木舟の昔からタービン汽船の今日に至る迄の船舶構造上の發達の歷史、木造船よりコンクリート船に至る迄の造成材料上の發達の歷史、櫓櫂時代より電氣推進に至る推進方法發達の歷史、木船時代より鋼船の今日に至るまでの積載力及び速力に於ける能力の發達の歷史、及び船舶能力の增加と收益力の增加との關係等を述べ、第五章は「船舶の種類」と題して右述べたる發達を經て來た船舶をば技術的、經濟的、法律的の見地からして之が分類説明を試み以て卷を終つて居る。

著者の論構は頗る組織的である、そのことは緒論第二章に於て本邦の經濟と海運との關係を述ぶるに當り、本邦の人口趨勢から食料品供給狀態に至るまで本邦の經濟狀態をば或は過ぎたりと思はるゝまでに綿密に論じ之と海運との關係に就ては僅かに數語を費すのみにして以て讀む者をして兩者の關係を了得するを得しめて居るの點に於て最も著しく現はれて居る。又本書は頗る readable である、このことは船舶論に於て著しい。蓋し船舶論は著者の言の如く海運經濟研究の豫備知識として必要なるものなるにも拘らずその研究は兎角閑却され勝ちである、それは實際從來の海運論に於ける船舶の説明そのものが餘りに技術的機械的にして讀者の興味を惹くに足りないの憾があつたことにもよるであらうが、經濟を修める者にとつては技術の事は分り悪いものとして始めから決め込んで居るといふ事情もないではない。然るに小島助敎授の船舶論は叙述は簡にして要を得て居り、文章は分り易い口語體、之を助くるに數十の寫眞版やレプロダクションや統計の挿入を以てして居る、以て前者の憾なからしめ後者の「不喰嫌ひ」の感情を驅逐するに充分である。紹介者は海運に關する邦文著書の少ない折柄此の好著の公刊を喜び、第二卷以後の速かに續刊せられむことを希望するものである。（增井幸雄）

中川正左著「鐵　道　論」

鐵道講習會發行

定價金二圓五十錢

本書は「現今の我が國有鐵道は果してその本領を發揮しつゝありや否や、その運賃制度は國有鐵道として果して妥當なりや否や、更に國有鐵道の經營は私有鐵道の範を以て任ずるの特色ありや否や等の疑問に答へむと欲」して「主として我が國有鐵道の眞相を闡明し之を以て獨逸の國有鐵道と比較せんと」するの目的を以て、鐵道